

編集後記

●今回のキャッチアップには、石川県珠洲市と共同研究を行った「バイオメタン発酵技術」をとり上げました。下水汚泥に加えて、し尿や浄化槽汚泥、農村集落排水汚泥、生ごみという5種類のバイオマスを混合してメタン発酵を行おうというこの取り組みは、これからの下水道事業が目指す道の一つである「資源のみち」を具現化した初めての施設と言えます。稼働開始から1カ月を迎え、順調な運転を行っている現場取材しました。

●メッセージは、日本下水道事業団の理事長に就任された石川忠男氏に「今は、もう秋」と題して執筆していただきました。石川理事長はこの中で、昭和30年代初頭に自らが体験した「汚わい船」による汚水の海洋投棄の話をもとに下水道事業への熱い思いを語っていらっしゃいます。そして、今後の下水道事業は、国、地方公共団体が連携を深めて、さらなる高度処理の推進にあたらなければならないと締めくくっています。

●今号では、先に開かれた第7回下水道政策研究フォーラムで浅野孝カリフォルニア大学デーヴィス校名誉教授が「持続可能な水資源としての排水再利用」をテーマに行った講演を新たに編集し直して掲載しました。浅野先生は、米国で行われて

いる様々な排水再利用の事例を紹介するとともに、今何が問題になっているのか、それを解決するための方向性をどこに求めればいいのかを分かりやすく示しておられます。是非ともご一読ください。

●エンジニアリングリポートは、下水道が大規模地震の被害にあった際にどのような影響を社会生活に与えるのかを分析・調査した「下水道の地震被害による社会的影響に関する調査研究」と、汚水圧送管路内で発生する硫化水素を低減させるための方策を示す「汚水圧送管路の硫化水素抑制対策に関する研究」をわかりやすくまとめました。

●トビックスは、原子力発電で使用された後の高レベル放射性物質の地層処理を行うため、日本原子力研究開発機構が北海道の幌延町に建設を進めている幌延深地層研究センター取材し、その研究の概要と地下500mまで立坑を掘削するため使われている最新技術を紹介いたしました。

●ユーザーリポートは、下水の高落差処理で採用事例の多くなってきた「らせん案内路式ドロップシャフト」をとりあげました。稼働開始からすでに10年以上が経過した長野県の千曲川流域下水道取材し、現在の状況などをお聞きしました。参考になれば幸いです。(編集委員一同)

表紙の 写真



次世代の新しい技術への期待と本機構の成長を象徴する意味を込めて、子供の写真をシリーズとして紹介しています。写真のお子さんは、石川忠男日本下水道事業団理事長のお孫さんの大畑風悟(ふうご)くん(5歳)とその弟の檀(だん)くん(9カ月)です。

風悟くんはサッカーのポルトガル代表のフィーゴから、また檀くんは同じくフランス代表のジダンから名前をとったそうです。この夏おじいちゃんの所に遊びに来た二人は、庭に仕立てたプールで水泳を仕込まれました。この訓練が5年目になる風悟くんは余裕の表情ですが、生まれて初めて水に浸かる檀くんはびっくりして泣き出してしまいました。でも大丈夫、あっという間におじいちゃんに負けないほどの泳ぎ手になりますよ、きっと。

題 字 財下水道新技術推進機構会長・葉山莞児
(大成建設株式会社代表取締役会長、(社)日本土木工業会会長)の揮毫によるものです。

季刊 下水道機構情報 Vol. 1 No. 2
2007年10月〈秋季号〉

平成19年10月15日発行 発行者 葉山莞児
編集者 松井大悟
企画者 谷戸善彦

編集委員：栗原 秀人／中里 卓治／鈴木 勇／小野田 吉恭／
目黒 享／鳥海 弘／秋葉 竜大／長岡 英明／後藤 太

発行所 財団法人 下水道新技術推進機構

〒162-0811 東京都新宿区水道町3-1 水道町ビル7階
TEL 03(5228)6511 FAX 03(5228)6512